

International Economic History Association (IEHA)

経済史研究者の国際的ネットワーク



沿革と日本学術会議の関わり：
世界各国の経済史に関する国内学会、及び経済史分野の国際学会の連合体として1960年に組織された。日本学術会議は、国内の複数の経済史関係の学会を代表して加盟し、日本の経済史学界全体を先端的な国際研究ネットワークと緊密に結びつけるリエゾンの役割を果たしている。

現在のIEHAの構成：
会長：Anne McCants (MIT)
副会長：Liliane Pérez (EHES, Centre Koyré)
事務局長：Jari Eloranta (University of Helsinki)
運営機構：General Assembly (総会) 3年に1回
Executive Council (理事会) 毎年

日本人研究者のプレゼンス：
IEHAでは数十年前から日本人が理事を務めてきた（現理事：城山智子（東京大学）2018年～）。岡崎哲二（東京大学）は、2012年～2015年に副会長、2015～2018年に会長、2018年以降は名誉会長を務めている。IEHAは、日本人研究者のプレゼンスが、きわめて高い国際学会である。

IEHAの目的：国際的研究ネットワークを通じて、経済史に関係する研究の普及・発展と出版の促進を進める。

学術的成果と社会貢献：

- 新しい学術研究の探求：経済史学は経済学と歴史学の境界に位置する領域であり、近年より高いレベルでの両分野の融合が進んでいる。
- コロナ禍にある世界への提言：パンデミックは数十年、数百年に一度の事象であり、十分なデータを得るためには歴史的なアプローチが必要となる。1918-20年のスペイン風邪等について、その経済的影響を検証する研究が行われている。

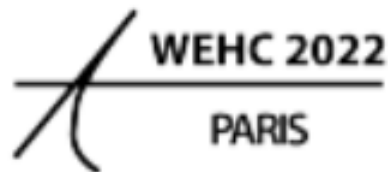
日本の貢献：こうした日本人研究者のイニシアティブの下で、3年に一度、世界の各都市で開かれる大会World Economic History Congress(WEHC)（1000-1400名の経済史・同関連分野の研究者が参加）が、アジアで初めて、2015年に京都で開催された。“Diversity in Development”を共通論題に掲げ、多元的な経済発展のあり方を、日本から世界に向けて発信し、大きな学術的・社会的貢献を行った。

XIX World Economic History Congress

第19回 世界経済史会議 (2022年7月25日～29日)



世界経済史会議は、IEHAの主要な活動の一つであり、2015年には京都で、2018年にはボストンで開催されてきた。2021年にパリで予定されていた第19回世界経済史会議は、コロナ禍のため一年延期され、2022年7月に開かれる予定である。地球環境の保全と持続可能な発展が求められる現代世界にあって、“Resource”（資源）を共通論題とする本会議には、200余りのパネル・セッションが生まれ、日本からも多くの研究者がエントリーを行っている。



XIX World Economic
History Congress

25 - 29 July 2022



<https://www.wehc2022.org/>